

正岡子規が隅田川向島墨堤から眺めた蒸気船？

正岡子規（一八六七年生・本名・常規）が、第一高等中学校に在学中だった明治二十一年（一八八八）の夏休み、向島須崎村（現・墨田区向島須崎町）の宝寿山長命寺門前の桜餅屋・山本屋の二階に仮寓し、『七草集』の前半部分を執筆したのは二十歳のころ。向島は江戸期から文人墨客の愛した地で、風雅を好んだ子規は、特にこの地を選んでいる。

明治十六年に故郷の松山から上京した子規は、この年の夏休みには松山に帰省せず、勉学のため「閑静なる地を墨江に卜し」（「筆まかせ」）、近郊を散策して『七草集』のうちの「蘭（ふじばかま）之巻」「萩之巻」「をみなへし乃巻」「尾花のまき」「あさかほのまき」の五篇と「かる萱の巻」を執筆した。

同年末には「葛之巻」を執筆。翌二十二年四月には「瞿麥（なでしこ）の巻」を加え、「かる萱の巻」を外して、秋の七草の名を篇名として『七草集』一冊にまとめている。『七草集』はそれぞれ漢文、漢詩、和歌、俳句、謡曲、論文文体、擬古文体を駆使したもので、子規の広範囲に及ぶ教養の高さを示している。

子規は『七草集』を友人たちに回覧し、巻末に余白を設けて評を書かせている。明治二十二年一月頃から同級生として交遊し始めたばかりの同年齢の夏目金之助（夏目漱石の本名）も、このとき評を書かされた一人。漱石は、五月に子規が突然咯血したとき、丁寧な手紙を送ったことから親友となった。

「七草集」概要

表紙は「無何有洲 七草集 全」（向島ななくさしゅう）とし、口絵として「金龍観音」「吾妻鉄橋」「真つち山」「長命寺」などの絵葉書十六枚が貼付されている。

「七草集は」月香楼」に滞在している間に「蘭之巻（漢文）」「萩之巻（漢詩）」「をみなへし乃巻（和歌）」「尾花のまき（俳句）」「あさかほのまき（謡曲）」までの五編と「かる萱の巻（擬古文）」を書き、その年の終わりに「葛之巻（評論）」を、翌二十二年四月に「瞿麦の巻（小説）」（なでしこ）を書き足した。「かる萱の巻」は秋の七草ではないので除外し、「七草集」と題して一冊にまとめたものである。

本文の終わりに、明治二十二年五月一日の日付で「七草集を読ミ給える君だちにまをす」を添えた。批評分をとじる表紙には「七草集批評 “Criticism on Nanakusa-shu.”と書いて回覧された。そして、読者が批評を赫ための五十丁の白紙を末尾に綴じ込んだ。

墨江僑居記（原漢文・大略）

明治二十一年の夏、いつもどおり、学校は六十日あまりの休暇に入った。学友の多くは帰省した。この墨堤の月香楼で、再従兄の三並良と従弟の藤野潔とで一夏を過ごすことになった。

ここは長命寺を背にし、牛嶋神社に接している。墨堤の高さは一丈ほどあり、市民が往来して騒がしい。樹木でその喧騒が遮られて、その樹間から隅田川の大方を見下ろすことができる。就寝が遅い割に早朝に目覚めてしまう。夜明けの景色を眺めると、朝風に霧が流れ広々として限りない。椅子にもたれて読書するうちに心も晴れてくる。ふと、視線を上げると川風が涼しい。白帆の舟が樹間に見え隠れする。日は晴れ泥ずみ、ようやく涼しげに月が川面に写って、あたりはひっそりとしている。対岸の鐘が聞こえてくると心はゆったりとしてくるのだった。こうして十数日暮らしてみると、雨の開け方といい風の夜といい、すべて期待していた以上のものがある。都会の人は墨江の本当の美しさが、桜や雪の日ばかりにあるのではないことを知らないのだ。同窓の友が小舟に乗って訪れると、月香楼の2階に招き入れて桜餅と櫻湯でもてなし、知られざる墨江の風光について語った。友の足が遠のくとさびしくなるが、都鳥に心を託して墨江の探勝に出かける事を欠かさなかった。このような日々が十日もすると心とこの環境がひとつになって、ひとりこの境地を思いのままに楽しんでいることに気づくのだった。言葉にはならないが、得るものはいよいよ多くなってくる。

記小景(小景を記す) 一

早朝の墨堤には誰ひとりいない。霧が川面をおおって大海のようだ。鳥がにわかに現れては消えた。しばらくして対岸が現れてきた。上げ潮が波ひとつ立たない。風がびたりと止んだ。対岸の街並みはまだ眠っている。霧の中の舟は画の中に往来するように見える。ふと、脳裏に名句が浮かんだがないまゝまらなかった。朝日が昇り、霧が晴れてきた。遙かかなたに富士山が突き出て、浅草寺の五重塔の先端にかかっているのは眺められる。

記小景 二

月香楼の前の墨堤に茶店がある。正午を過ぎて、照りつける太陽はいよいよ烈しい。涼風が木々を揺らし水面も揺れた。雨が降るように蟬が鳴き、一斉に泣きやむ。帆掛け舟は先を争う鷺の群れ、釣り船の釣り糸は風にひるがえる柳、学生のボートは水をかすめて飛ぶ都鳥、水を切る**蒸気船**は空に登黒竜のようだ、五官が心と呼応して我を忘れ、一語も発することができないほどである。

記小景 三

墨江の明け方は、からりと晴れて塵ひとつない。この景色も良いものだが、暮色が明滅してうすぼんやりとして万物が一つになる風情にはかなわない。日は今にも沈まんとして、さざ波がきらきらと輝く。淡いかすみがただよって桜柳の間を流れ、鉄橋の上にまで続く。

富士山は青みを帯びて絵のようだ。美しい雲もただよっている。四方の眺めも美しい。紅色の空も、やがて暗くなった。しばらく目を閉じて佇んでいた。

記小景 四

友達が遠くから訪れてくる。いつも、朝来て帰りは夜となる。その時は必ず送っていくのだが、実は夜景を愛でるためでもある。墨江の景色は枕橋でつきのので、そこから引き返す。帰り道は、あたりをゆっくりと眺めながら帰る。川岸で水をすくい襟をゆるめて風を入れると、盛夏であることを忘れてしまう。月が波にゆれている。川風が水を渡り、舟遊びの音曲さがしきも忘れてしまう。こうしていると名利も、己の立場も、この場所も、帰ることすら忘れてしまうのだった。今、総てを忘れることができたのは、この風光に心が魅了されてしまったからだ。この墨江の風光美の素晴らしさは、これによってわかるだろう。

記小景 五

読書は夜半に及んでも、眠気は催てこなかった。蚊の音は雷のようだ。蚊帳に入ると、横になると、犬の声な川を隔てて届く。木々の葉がゆれている。さざ波が墨堤を打つ。にわかに鳥が鳴く。漁師の舟唄が、遠くまでよく通る声で聞こえてきた。鱗がきしんで雁の鳴くように聞こえてくる。なにか、しんみりとさせるものがある。窓を開くと川面にくっきりと月が映り、向こう岸は霞んでいた。明かりがひとつの波間に浮かんで消えていった。

記小景 六

薄化粧をしたような雨天の風情にも素晴らしいものがある。墨江の景色には雨の景色が欠かせない。雨の日には、岸边からこの趣深い眺望をひとり占めにするのだ。すると、にわかに風が吹き、雨足が横に流れ、柳がひるがえる。川面は白く波立ち、土手の木々の葉がはらはらと散る。

対岸の待乳山がぼんやりと見える。さながら米芾の筆になる画のようだ。蓑つけ棹さす舟がゆく。森に浮かぶ五重塔は、王維詩中に浮かぶ画のようだ。この景もこの趣も、米や芾や王維の技量でしかあらわせない。いつになったらこの奥深な景を自由自在に写し取ることができるようになれるだろうか。

正岡子規の眺めた蒸気船の正体は、外輪蒸気船かぼんぼん蒸気船か？

蒸気船の表記が

正岡子規、七草集の、

記小景 二

月香楼の前の墨堤に茶店がある。正午を過ぎて、照りつける太陽はいよいよ烈しい。涼風が木々を揺らし水面も揺れた。雨が降るように蟬が鳴き、一斉に泣きやむ。帆掛け舟は先を争う鷺の群れ、釣り船の釣り糸は風にひるがえる柳、学生のボートは水をかすめて飛

ぶ都鳥、水を切る蒸気船は空に登黒竜のようだ、五官が心と呼応して我を忘れ、一語も発することができないほどである。

これは、正岡子規が明治二十年代の隅田川には、多くの白帆の和船や、釣舟、学生が練習するボート、さらに航行する蒸気船の情景を墨堤から眺めた景色として描いたものです。

往時の隅田川の水運は、一銭蒸気の出現から川蒸気船へ 推移していた

一銭蒸気は明治・大正期の都市風景には欠かせないものである。ではいつから「一銭蒸気」が使われたのかははっきりした定説はない。

1 番目の説は、昭和 54 年の『国史大辞典』によれば、「明治 18 年浅草～両国館に始めて川蒸気が就航し、その後八丁堀、中之島、千住大橋へと区間を延長した」とある。

2 番目の説は、墨田川汽船会社の古川孝七氏である。『隅田川に火船を上下せしものの嚆矢たり』と『京浜実業家名鑑』（京浜実業新報社 明治 40 年）に紹介されている。

明治 18 年古河孝七が設立した『隅田川汽船株式会社』が吾妻橋と永代橋間の運航を開始する。また、同年の 10 月 23 日の読売新聞には、『大川（隅田川）を往復する蒸気船は追々乗客があるに付き、銀座 3 丁目の中北米吉と小梅業平町の古河孝七が持ち主にて、小汽船 12 艘を以て屋形を作り、和船 24 艘を引船に着け、航路は京橋区八丁堀中の橋より千住橋までとし、この間を 5 区に分け 1 区 1 銭づつにて午前 7 時より午後 7 時まで営業するといふ』。この記事によって、航路が延長されたこと、1 区 1 銭であること、機関船と客船とが別々で引船であったことなど。

3 番目は、明治 18 年 7 月 2 日、隅田川が大洪水となり吾妻橋が流失した、足を確保するため臨時に使用されたのが石川島造船所の『第四痛快丸』だと言う。これが起源だと『本元昌造・平野富二詳伝』（昭和 8 年）にある。

4 番目の説は、明治の実業家・緒明菊五郎が永代と両国の間に使用したのが起源だという。一銭蒸気は好評で続々と新航路が開かれた。一銭蒸気は焼き玉エンジンだった、特有のぼんぼんと音がして『ぼんぼん船』と親しまれた。

隅田川を航行する千住吾妻汽船の一銭蒸気は「上流に向かう船は緑色に塗られ、青蒸気と呼ばれた」「下流に向かう船は白く塗られ、白蒸気と呼ばれた」のである。

明治時代になると、渡船は水上交通へと変貌した



東京両国通運会社 川蒸気往復繁栄真景図 重清 東京都公文書館蔵 (36.6×24.7 センチ) 三枚構成

右の建物は両国橋付近に立つ東京両国通運会社、会社の旗も翻っている。

明治期の渡し場風景

明治から大正にかけて東京の川には、約 68 の「渡し場」があった。明治政府が明治 4 年より橋梁・渡船の整備を奨励し、私設の橋や渡船に免税の措置を取ったため盛んになった。道路はほとんど変化せず江戸時代のままだった。また、武士の無賃も廃止された。渡し賃を取ることも認められ、1 人あたり、一厘から五厘～七厘ぐらいであった。江戸時代よりも明治の方が渡しは盛んになったのである。特に下町の人口が増えるに従い、隅田川や大川に渡しが増えたのである。(中央区にも渡しの資料があります)

しかしながら、ここでいう蒸気船は、筆者が期待する外輪蒸気船であるかどうかは、定かではない。4 番目の説によるぽんぽん蒸気船なのかもしれない。

いずれにしても正岡子規の眺めた蒸気船の正体は、具体的には浮かんでこない。さらなる調査が必要である。